

森丘正唯（1880-1967）

日本一若い村長

森丘正唯は明治 13 年(1880)、大布施村中新に生まれました。中学卒業後、村人たちに推されて大布施村の村長になりました。この時、森丘は 20 歳、日本一若い村長でした。しかし翌年、村長を辞職し、早稲田専門学校（後の早稲田大学）政治経済学部に入學しました。その後、大布施村に帰り再び村長になりました。

再び村長になった森丘は、大布施村の土地改良事業や農業技術の改善推進等に力を注ぎました。また、人材育成のため明治 43 年、三日市に下新川郡立農業学校（現在の桜井高等学校）を設立しました。

水の悩みを解消する

古くから暴れ川の異名を持つ黒部川の水を治めることは大変なことでした。そこで森丘を中心として大正 15 年に三ヶ、若栗、荻若、合の 4 用水が合併して黒西合口用水組合が結成されました。この黒西合口用水組合によって計画・実現されたのは、用水を堰き止める大堰堤を建設して灌漑と発電を同時に行い各用水に分水するという事業でした。これは水の多目的利用をするという画期的なものでした。

昭和 7 年に愛本堰堤と黒西合口用水が完成し、これにより黒部川流域の農民たちの洪水や水不足の不安が解消されました。この堰堤が、昭和 9 年の大洪水で奇跡的に被害を受けな



かったことに感謝して黒部川神社が建立されています。境内には森丘の胸像が建てられており、功績を今に伝えています。

地域の発展のために

昭和 15 年の町村合併によって桜井町が誕生し、森丘は初代町長となり、黒部市民病院の前身である「桜井町国民健康保険組合長直営組合立下新川厚生病院」の設立にも貢献しています。

